

「東日本大震災」2011. 3. 11との遭遇

1班 A 白田 昭

そのとき私は、黒松市民センターにいて、大きな揺れを感じた。直ぐ収まるだろうと様子をみていたが、揺れは増々大きくなってゆき、建物が崩壊する危険を感じたので駐車場に逃げた。はじめは立っていたが、すぐ立っていられなくなり、しゃがみこんだ。揺れはさらに大きくなり、周りを見ると自動車がジャンプするかのように揺れている。これは大変なことになる！と、鳥肌が立った。

大きな揺れが収まったので、すぐ自動車に乗り、安全運転で家に向かった。信号はすべて消えていた。交差点では、お互いの車を見ながら、ゆっくり走った。

家に帰ると、家内がビックリしたような顔をしており、ちょっと震えているようにみえた。聞くと、大きなテーブルの下にもぐっていたとのこと。テレビが大きく動き、パソコンが倒れていた。棚は柱とつないでいたので大丈夫だった。冷蔵庫は 20 センチほど動いただけで、揺れの割には被害は少なかった。しかし後で見ると、二階の屋根瓦が 2～3 割落ち、小さなヒビが、ブロック塀・家の土台や壁に何本か認められた。

まず頭に浮かんだのは「断水」であった。そこで、ヤカン、ナベ、ペットボトル、ゴミ袋、風呂など、総動員して水を溜めた。これで1週間は持つだろう。しかし、結果的に水道は止まらなかった。これだけの地震で水道が止まらなかったのは奇跡に近い。農学部では何本かの配管から水が噴き出し、大元のバルブを閉めざるを得ず、復帰まで1ヵ月ほどかかっている。

今回の地震では、1～2階建の家での被害は少なかったが、マンションの上の階では揺れが大きく、床には壊れたガラスが散乱した家もあった。マンションに住んでいる人は余震への不安も大きく、避難した人が多かったようだ。避難した所は付属中学校と上杉山中学校である。

付属中学校は「避難場所」に、上杉山中学校は「避難所」に指定されている。

しかし、「場所」と「所」との違いを知ってる人は極めて少なく、混乱を招いた。

・「避難場所」は、災害時に一時避難する場所で、大きな公園や緑地、校庭など、屋外が対象である。ビルなどが崩壊する危険がある時に、一時避難する安全地帯だ。

・「避難所」は、災害で住む家を失った人の生活場所になる所で、食料や水の備蓄、トイレなどがある。避難した住民は、災害の危険性がなくなるまで滞在することができる。長引いた時は、水や食料などの物資援助も行われる拠点施設である。

しかし、多くの人は地震で混乱しており、「避難場所」と看板が出ているのに付属中

学が校内に入れてくれなかったことに不満を持った。改善法はないのだろうか？ 1日だけでも雨風をしのぎ、水道とトイレを使わせてもらえるだけでもありがたいと思うのだが。今は、誤解のないよう「建物の中には入れません」と看板に書かれている。

当日の夜は、救急車などのサイレンが鳴り響いていた。停電なので、テレビは見られず、蛍光灯もつかず、ラジオと懐中電灯がよりどころであった。余震も多く、寝ていても揺れているような錯覚に陥ることもあって、ビックリした。電話や携帯もつながらず、2～3日はあまり情報が得られなかった。

このような状況の中で、「河北新報」は休むことなく配達され、その底力に感服した。河北新報社は、新潟日報社に紙面制作を依頼し、被害を免れた印刷センターで印刷、震災当日の号外と翌日の朝刊を発行したのである。この時の津波被害の写真は、今も忘れられない。

電話やメールは使えるが、ほとんど通じない状況が続いた。安否情報をどう伝え、どう知るか？ そこで、災害用伝言ダイヤル「171」に伝言メッセージを入れておいた。すると、東京にいた息子がそれを聞いて、我々の無事を知ったという。意外と役にたつものだ、と認識を改めた。メールは電話より早く、13日頃から通じるようになった。なお、病院(医院)の電話は、普通の電話より通じやすいようである。

寒かったが、電気が来ないので石油ファンストーブは使えない。持ってる人は少ないが普通の石油ストーブは、上でお湯も沸かせ、煮炊きもできるので重宝された。電気の回復は早く、13日の16時であった。回復はありがたかったが、テレビで津波の映像を見て啞然(あぜん)となった。これほどとは・・・言葉が出なかった。

巨大地震で道路が使えなくなると、生活資材が入らなくなる。仙台でも少ない商品を求める客であふれた。水、卓上ガス、電池、トイレトペーパーはすぐ品切れに、そして食品全般、お米なども入手困難になった。マッチやライターがなければ、ロウソクに火もつけられない。不便さを実感した。

車にガソリンを入れるのも大変。給油できるとわかると、自動車が道路沿いに並んだ。その列は異常に長くなり、何事かと思った。4～8時間待ちもあったと聞く。北六番町の郵便局には、トイレを借りるため何人かが駆け込んでいた。インターネット上では、どこそこのガソリンスタンドで給油できるとの情報が流れた。そんな状態が数日続いたあと、自動車の長い列が通行の邪魔になるとして、警察はガソリンスタンド側に対応策を求めた。その結果、スタンドでは給油の時間帯を示した整理券を並んだ車に配布することにした。この効果は大きく、並びはみるみる減っていった。スバラシイと

思うと同時に、なぜもっと早く実施できなかったのか、との思いも。

市ガスは、その日は使えたが、翌日には止まった。回復は遅れ、我が家で使えるようになったのは1ヵ月後の4月13日である。ガスが止まると、料理ができない、ガス風呂に入れないなど、きわめて不便である。電気風呂を持ってる方から「どうぞ入りに来て下さい」と言ってもらえたのはありがたかったが、七輪で大量のお湯を沸かし、風呂場で体を洗ったり、拭いたりした。

今回の大震災を経験し、近所の人との協力、情報交換が大切だと感じた。

また、非常時に役立つであろう以下の豆知識も参考になると思う。

- * 煮炊き : 卓上ガスコンロも意外と有用、七輪と炭は何年たっても使用できる
- * 寒さ対策: 体を新聞で巻き、ラップで包む、湯たんぽは、ペットボトルで作れる
- * 水確保 : ペットボトル、ヤカン、鍋、バケツ、ダンボールの中にゴミ袋2枚重ねて、浴槽(洗濯・水洗トイレ用にも)など・・・用途を考えて多めに確保する
- * ラップ : 茶碗など洗えないときは、皿などにサランラップを敷いて食べる
- * トイレ : ウンチは穴を掘り外で、あるは新聞の上にしビニール袋に包み生ゴミへ
- * 薬 : 毎日飲む薬は、1～2週間分を保存しておくことが望ましい。
- * インターネット: いろいろな情報が得られ役立つ。AED(電気ショックで心臓の働きを戻す機器)、公衆電話の設置場所、危険地域、お店情報も探せる

最後に、東日本大震災のデータをまとめた(2011.5.11の河北新報などから)

- * 本震 : マグニチュード(M)9。震度: 栗原7、宮城野区6強、青葉区6弱
(1800年以降、地球上でM9以上の地震は、8回起きているだけ)
- * 死者 : 1万5千人(宮城9千人、仙台680人)
- * 行方不明: 1万人(宮城6千人、仙台180人)
- * 避難者 : 12万人(宮城3万3千人、仙台2千人)
- * 断水 : 宮城45万戸
- * 断ガス : 宮城33万戸
- * 停電 : 東北466万戸(契約戸の8割)
- * 鉄道 : 東北新幹線は4月29日に全面復興した。常磐線は、沿岸の鉄路で23駅が流失し、放射線汚染も強いたため、全線再開は2019年度末の見通
- * 余震 : M5以上は446回。ピークは4月12日の126回、5月は1日30回以下
- * 福島原発: 地震と津波で停電により冷却がストップし、水素爆発が起きた
流出した放射能の量は、広島に投下された原爆168個分、危険度は

「4」から、チェルノブイリと同じランク「7」に変更された

追) 平成 23 年、町内会は総会の了解を得て、義援金 10 万円を振り込んだ。